

■研究・実践の課題（テーマ）

大学生の歯科口腔保健行動への大学教育と過去の教育・経験の影響および臨床現場との双方向性教育の検討

■主任研究者 浅野妙子

■共同研究者 松下英二、橋口桂子

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

目的

大学生の歯科口腔保健行動はどのような経緯で形成され、その経緯を踏まえてどのように大学教育に取り入れられているのかを明らかにする。そのために、先行研究について文献レビューを行い、大学教育における歯科口腔保健行動について今後求められる研究およびその方向性について明らかにすることを目的とする

方法

文献レビューは次の1～4について検討を行った

1. 大学の専門教育における教育の内容と方法（カリキュラム）（文献数：16件）
2. 新たなビデンスによる学習内容の変化（文献数：4件）
3. 歯科口腔保健行動の変容支援（文献数：21件）
4. 政策による取り組みの変遷と展開（文献数：4件）

昨年度までの研究成果として、大学生の歯科口腔保健行動の基盤となる小学校～高等学校においての意識や行動変容に必要な因子は、小学校では「保護者による直接的サポート」「歯磨きの自己責任による実施」であった。中学・高校では「保護者による間接的なサポート」に加えて「知識や技術の再教育」、「家族全体での健康意識の向上」であり、学生自身の「自律的な健康観」に基づいて、全般の保健行動を成人に向けて保護者依存から自己責任への切り替えへと移行するということが明らかにされた。

この結果を踏まえ、上記1～4の視点で、文献を収集、分析して大学教育に必要な歯科口腔保健行動の方向性を検討した

結果・考察

文献レビューにより、以下についての見解が得られた

大学における歯科口腔保健に関連した教育内容において、特徴的とされるのは医療系のカリキュラムと非医療系の大学におけるカリキュラムの相違である。前者では口腔ケアを中心とした技術・スキルを磨くためのカリキュラムにおける工夫がみられるのに対し、後

者では健康診断などの機会を捉えて保健行動を促すなどの機会教育や、行動目標の設定と確認、口腔内細菌数などのデータを提示しながら、行動変容を促すためのカリキュラムなど工夫がみられた

また、新たなエビデンスや概念モデルに基づき、それらを教育内容に取り入れている実態も明らかとなった。

歯科口腔保健行動に関する文献は最も多く、自律的な行動変容は、どのような教育的、家族的な背景によりもたらされるか、という研究結果に基づいて大学教育の方向性の示唆がされている。また、個人、集団教育の相違により現れる効果とそのアプローチについて今後の方向性が示唆された

歯科口腔保健の分野は、新型コロナの流行を経て、大きな変化が求められている。特に「口腔ケア」ではその行為自体が感染拡大のリスクを伴う一方で、自らの「口腔ケア」と、医療の現場で行われる他者への「口腔ケア」は避けることができない。「口腔ケア」に伴う感染リスクの実態についてエビデンスを伴って明らかにし、新たなケアモデルの開発と教育が急がれる